

ピースウィンズ・ショップから

200gの焙煎豆の販売を開始

ピースウィンズ・ジャパン(PWJ)が、コーヒー生産者の支援を続ける東ティモールのエルメラ県レテフォホ郡とリキサ県リキサ郡では、今年もコーヒーの収穫作業が始まりました。今年は豊作の年であることから、日本への輸出量はPWJ初の100トン超えが予想されており、生産者とPWJスタッフは大忙し。コーヒー生産地では、一家総出でコーヒーの収穫やパッチメントへの加工を行っており、どこも活気にあふれています。新豆の到着が楽しみですね。

さて、ピースウィンズ・ショップでは、挽いた状態のレギュラーフィルターに加えて200gの焙煎豆の販売をはじめました。これまで業務用の500gのみでしたが、家で使うには多いので200gを作つてほしいという皆さまの声にお応えしました。

挽きたての香りを思う存分楽しめ、約20杯分(1杯10g使用時)と、豆の鮮度を保ったまま飲みきるにはぴったりなサイズです。

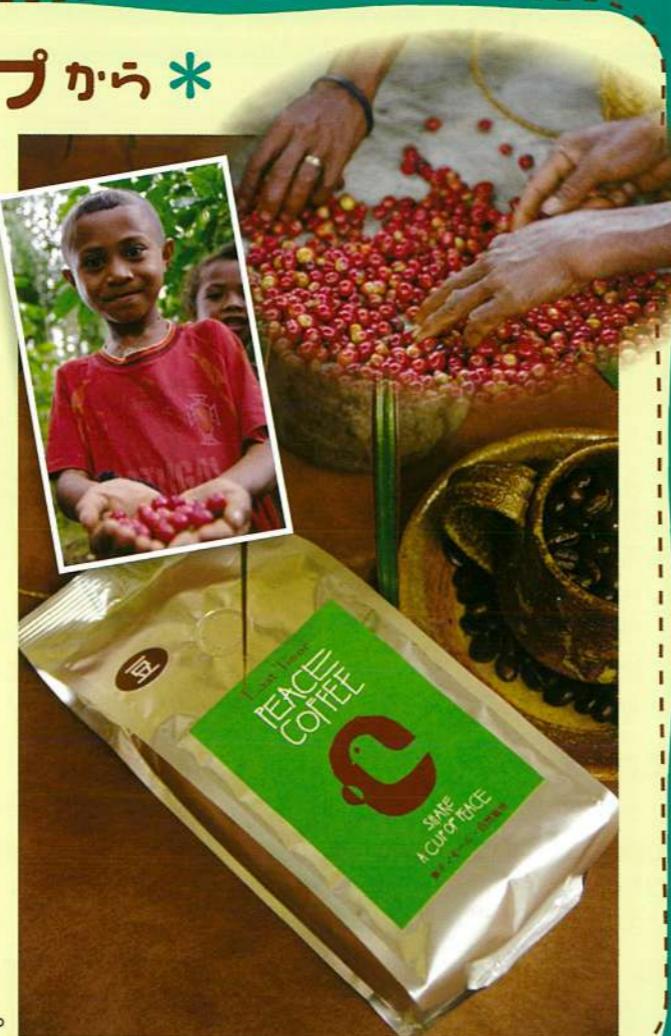
さらに、200g焙煎豆には有機認証のJASマークをついているため、フェアトレードコーヒーなどではなく、オーガニックコーヒーとしても皆さんに選んでいただいています。

ミルでコーヒーを挽く時にコーヒーの香りが部屋中に広がる至福のひと時。皆さま、贅沢な一杯はいかがですか?

ご注文は、<http://www.peace-winds.org/shop/>

FAXまたはお電話TEL:03-5213-4073でも受け付けております。

※ピースウィンズ・ショップの収益はPWJの支援活動に活用されます。



12月19日(水)、東北被災地の子どもたちによるミュージカルを開催

お知らせ

PWJは東北被災3県の子どもたちによるノンフィクションミュージカル「CARE WAVE AID vol.5」を、パートナー団体のNPO法人 CARE-WAVEと共に実施します。3・11を経験した子どもたちが、「日本の平和」「世界の平和」のために大人たちへ伝えたいことがあります。チケットの発売開始は10月頃を予定しています。

「CARE WAVE AID vol.5」公式HP
www.peace-winds.org/musical.html

10月6日(土)、7日(日)グローバルフェスタに出展

グローバルフェスタは、毎年東京の日比谷公園でおこなわれる国内最大規模の国際協力イベントです。PWJのブースでは、プレゼンテーションやパネル展示による活動紹介、東ティモールのピースコーヒーなどのフェアトレード商品の販売を行います。PWJブース以外にも様々な団体が参加し、フードコーナーも充実しており各国の料理も楽しむことができます。皆様ぜひお越しください!



発行／特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパン 〒102-0074 東京都千代田区九段南4-7-16 市ヶ谷KTビル 5F
TEL 03-5213-4070(代表) FAX 03-3556-5771 フリーダイヤル 0120-252-176
ホームページアドレス <http://www.peace-winds.org> メールアドレス meet@peace-winds.org

PWJの活動にご協力ください

※認定NPO法人のPWJに対するご寄付は、寄付金控除の対象となります。

【郵便振替】

口座番号: 00160-3-179641

加入者名: 特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパン

※特定の地域・活動へのご支援の場合は、通信欄に国名等(東日本大震災の場合はその旨)を明記してください。

【銀行口座】

●PWJの活動全般へのご寄付

銀行名: 三井住友銀行 青山支店

口座番号: 普通 1671932

口座名義: 特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパン広報口

●PWJの東日本震災支援へのご寄付

銀行名: 三井住友銀行 桜新町支店

口座番号: 普通 6723184

口座名義: 特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパン

※領収書が必要な場合はご連絡ください。ご連絡をいたしかねない場合、銀行振込ではご住所が分かりかねますので、領収書を発行できません。

- ・朝日新聞に、南スダーン現地事業代表 石川のインタビューが掲載
 - ・雑誌25ans8月号にPWJの活動が紹介
 - ・The Japan Timesに フェアトレード事業が掲載
 - ・AMラジオ局 ニッポン放送「阿部亮のNGO世界一周！」にPWJ備中が出演
- メディア掲載報告

支援のプロを、
世界の現場へ

未来をもつ子どもに



南三陸町の浜辺

6月30日の朝、宮城県南三陸町の仮設住宅を巡回するマイクロバスに、子どもたちが次々に乗り込んでくる。ピースウィンズ・ジャパン(PWJ)が町内の小学生を対象に開く体験講座「南三陸アフタースクール」の参加者だ。気持ちの高ぶりを表すように、おしゃべりの声がだんだん大きくなる。

町の中心部に入ると、車窓には、今もうず高く積まれたがれきと、夏草に覆われたさら地が広がる。やがてバスは、町の魚屋マルセンのかまぼこ工場に到着した。津波で工場も店も流されたが、昨年12月、再建にこぎつけた。

帽子やマスクをつけて工場に足を踏み入れると、子どもたちの表情がさっと引き締まった。迎えた三浦洋昭社長が、おだやかな口調で説明を始める。機械では1日に2000枚のかまぼこができる事、原料の魚のこと、絵付けかまぼこに震災後は「絆」の文字を入れるようにしたこと。子どもたちはメモをとりながら聞き入り、用意してきた質問をぶつける。

この体験講座は、南三陸の産業や歴史を学ぶ場を提供しようと、町や地元の団体と協力して6月に始めた。震災前に続けられていた「ふるさと学習会」を参考に、さまざまな仕事や活動をしている町民が先生役を務めることで、地域に伝わる知識や経験を次の世代に受け継ぐねらいだ。

かまぼこ工場を後にし、この日の活動が終わりを迎えたころ、だれからともなく「鬼ごっこがしたい」と声があがった。1年生から6年生までが一緒になり、しばらくの間、目を輝かせて走り回った。震災以降、運動場や空き地には仮設住宅が並び、子どもの遊び場は限られている。南三陸アフタースクールは、友達と遊べる貴重な時間である。

日々の生活に追われる大人が、次の世代の成長に目を向ける機会になるように。そして何より、子どもたちが生まれ育った町をもっと好きになれるように。南三陸町の活気を取り戻す一助となることを願って、PWJの事業は続けられている。



南三陸アフタースクールとは？

小学生を対象とした体験学習講座です。PWJと一般社団法人南三陸町復興推進ネットワークが共同で運営しています。震災以降、町民の多くが仮設住宅へ移り住み、土地利用の問題からも子どもたちの活動場所や行動が制約されました。未来を担う子どもたちに「安心して学べる場」「多様な体験の場」を提供することで、震災前からあった地域住民のつながりを取り戻すことを目的としています。

南三陸アフタースクールのとある1日 ～かまぼこ工場見学編～



08:30 各地区的仮設住宅を巡回し、子どもたちを迎えていきます。みんなで顔を見合わせおおはしゃぎです。

10:00 地元で再建したかまぼこ工場に到着！衛生用の帽子とマスクを装着して話を聞きます。みんなとても真剣な表情です。震災後にどんな商品をつくり、どのようにお客様に販売しているのか、質問が飛び交います。



11:00 山間の公民館に移動し、今日のかまぼこ工場のようすをオリジナルの新聞にします。工場見学して分かったことなどを自由に書きました。



12:30 帰りのバスの中でも、興奮冷めやらぬ子どもたち。午後にまた遊び約束を交わしてそれぞれの家に帰ります。

参加した子どもの親からの声

「南三陸アフタースクール」から帰ってくると、今日あつたことをこと細かに話してくれます。町内のことなど子どもたちの活動を通じて、聞くことが出来るので私たちも勉強になります。何よりも子どもたちが元気になってくれているので、うれしいです！

「来週の活動は、何時からで、何時にバスが迎えに来るから～」と張り切って準備しているんですよ。

東北のいま

東北事業担当 備中 哲人

震災が起つてから2度目の夏がやってきました。昨年は住民の方たちの中でも七夕祭りなどを行うことにためらいがありました。今年は往時を彷彿させるような熱気で開催されています。街中の瓦礫撤去や被災した建物の解体も進む一方で、浸水地域のかさ上げや住民の高台移転、雇用の安定などまだ道筋が見えないことに不安を感じる声も耳にします。そんな中、PWJは南三陸アフタースクール以外にも、宮城県南三陸町でウニ・アワビ漁の再開支援や岩手県大船渡市、陸前高田市で地域の防災を担う自主防災会への支援を計画しています。また地域の特産物を活用して観光につながるような支援ができないかなとも模索をしております。教育や漁業、防災から観光など多岐にわたる支援を考えていますが、すべては被災地域の活性化につながり、被災地が被災する前よりも魅力的な街になることを願つて活動を続けていきます。



難民の急増、追いつかない支援－東アフリカ干ばつ－

●1軒でも多くの仮設住宅を

今年の2月、PWJはケニアにおいて、隣国ソマリアから避難してきた難民の支援を始めました。背景にあるのは内戦と干ばつです。ケニアのダダーブ難民キャンプは、1991年の内戦以降、戦火を逃れた9万人のソマリア難民を収容していましたが、昨年の大干ばつで更に15万人が流入し、緊急人道支援が必要な状況となりました。赤道直下の半乾燥地帯にあるキャンプは、昼間は気温が40度以上。暑さをしのぐ木陰もなく、強い日射しや風で破れたテントは、ビニールシートの切れ端や布で貼り合せてあります。こうしたボロボロのテントを1軒でも多く仮設住宅に建て替えていくのが今回のPWJの支援です。



●世界最大の難民キャンプの課題

ダダーブ難民キャンプが直面する課題の一つは国際社会の関心の薄さです。世界最大の難民キャンプである同キャンプは、設営から20年がたちますが、悪化するソマリア情勢と干ばつにより、縮小できる見込みはありません。



長すぎる人道危機に、国際社会の関心も薄れ、資金を集めることがとても難しい状況です。現在PWJを含む約30のNGOや国連機関が支援活動をしていますが、資金不足のため、テントで暮らす2万家族のうち年末までに仮設住宅に移れるのは、ほんの1割の約2,000家族に過ぎません。

●安心して生活できる環境を

難民キャンプ支援のゴールは、キャンプがなくなること、すなわち難民が故郷へ帰り平和に暮らせる状況が早く実現することですが、現在のソマリア情勢では、その日が来るのは遠いと言わざるをえません。ソマリアの将来と国際社会からの支援。両方とも先の見えない状況で、難民たちは不安な気持ちで暮らしています。



PWJは1世帯でも多くの家族がテントから仮設住宅へ移り、安心して暮らしていくよう、これからも支援を継続していきます。

仮設住宅に住む人びとの声

母親「去年の夏からテントで暮らしていましたが、着替えにも困りましたし、強盗も心配でした。一番ほっとしたのは、ドアがあつて鍵がかけられることですね。これで夜も安心して眠ることができます。」

息子「ピースウインズがあうちを作ってくれてすごくうれしい。前は、お父さんが外で寝ていたけれど、今は家族みんなでおうちの中で寝ることができます。キャンプでできた友だちは、いつおうちが建つか分からなって言っていました。ぼくは、友だちも早くおうちに住めるといいなと思います。」



緊急支援レポート

フィリピン洪水の被災者へ物資を配布

8月6日から9日にかけて続いた豪雨により、フィリピンでは、洪水被害が発生。8月16日にPWJボーマン真理子が現地入りし、現地NGOと連携し、食糧や水などの緊急支援物資を配布しました。



ニジェール食糧危機の支援を開始

ニジェールでは長引く乾季と不規則な雨で農産物の収穫高が激減し、食糧不足と食糧価格の高騰が続いています。PWJは8月からこうした食糧危機に瀕した住民4,000人に対し、土地整備などの作業機会を設け、その労賃を支払うことで食糧の購入ができる「キャッシュ・フォー・ワーク」事業を実施することを決定しました。



ハイチでの支援活動を終了

PWJは、2010年1月に発生したハイチ大震災に対応しこれまで活動を続けてきました。震災直後は、1,000セットのがれき除去のツール・キットと450張のテントを配布しました。この後、教育支援として、のべ32校207仮設教室の建設により、9,648人の生徒に、勉強を再開できる環境を提供しました。

地震直後の緊急支援から復興支援へと移り変わろうとしているハイチにおいて、PWJとして被災学校の再開支援のニーズを満たしたものと判断し、ハイチにおける支援活動を終了しました。

